

## 視点1

# 子どもが「安心」して遊ぶとき

岩田恵子

(大学教員)

### モノとの対話

子どもが本当に「安心」して遊んでいるとは、どのようなときでしょうか。

歩き始めて間もないSちゃんは、自宅でお客さんが持ってきた新しいおもちゃに出会いました。そのひもの付いたおもちゃは、引つ張ると動くのです。そのことに気付いたSちゃんは、ひもを持って必死に歩き始めました。少し歩いては振り返り、自分の持っているひもの先におもちゃがあることを確かめています。さらには、腕を前に伸ばして、自分の先におもちゃが行くように試みたり、歩くスピ

ードや距離を変えてみたり、と引つ張り方をさまざまに変えています。いずれもおもちゃから伝わってくる感触が変わるようです。そのように試みているとき、おもちゃがひっくり返って、今までと違う音を立て始めました。その音に気付いてびっくりした顔をして振り返ったSちゃんは、その状態を確かめるようにおもちゃを見ながら引つ張っていました。

また、ある幼稚園にお邪魔したときのことです。園庭で、山のようになった所から水を流して遊んでいる場面がありました。水をくんできては山の上から流すことを繰り返し注いでいる子がいる一方で、水が流れていく先に注

岩田恵子（いわたけいこ）

玉川大学教育学部教授。子どもたちが仲間と育つプロセスを知りたいと幼稚園に通ううち、保育の場の営みに魅せられて、日々、私自身が学んでいる最中です。

目しているN君がいました。じっと水の流れを見ていたかと思うと、水が流れていきそうな先に溝を掘り始めました。水の流れが来なくなると思えばらく待ち、また水が来ると溝を掘っています。そして、その水の流れが他の流れと合流したとき、N君は、ほっと一安心したような表情を浮かべていました。

「安心」して遊んでいるとき、と言われて、ふと思ひ浮かんできた二つの場面を描いてみました。年齢も場面も異なりますが、ここには幾つかの共通することがあるように思えます。まず、SちゃんもN君も、じつくりと一つのコトに取り組んでいることです。そして、その一つのコトに対して、SちゃんもN君も真摯に働き掛け、その働き掛けによるモノや出来事の変化、モノや出来事が彼らに返してくれることをしっかりと見つけ、その変化に応じてさらに働き掛けています。あたかもさまざまな対話が子どもたちとモノとの間でな

されているかのようです。このように、あるモノやコトに夢中になりじつくり取り組む子ども、モノとの対話、モノの探究の世界を、子どもが「安心」して遊んでいる姿と受けとめることができるように思えます。

### モノとの対話が広がるとき

このような子どもとモノとの対話が保障され、さらに広がるのは、どのようなときでしょうか。

Sちゃんの場面に戻ってみましょう。Sちゃんのお母さんは、Sちゃんがおもちゃを引っ張ることを楽しみ始めたのを見て、「動くんだね」「Sちゃんについてくるね」など、Sちゃんの動きに応じたモノの変化を描写するような言葉を掛けていました。そこには、Sちゃんとモノとの対話を一緒に味わう世界があったように思います。さらには、Sちゃんが十分にそのモノとの対話を楽しめるように、

障害になる物をさりげなく移したり、広いスペースで楽しめるように廊下へのドアを開けたりして、空間を作り出していました。子どもが安心してモノとの対話を深めるには、共にいる大人もそのモノとの対話を楽しみ、また、そのモノとの対話が続くような空間を作り出すことが伴っているようです。

保育の場では、このような子どもとモノとの対話を、保育者が共に楽しみ、空間を作り出しています。そして、そのようにある子どもと保育者の探究の世界に、他の子どもたちも引きつけられていきます。他の仲間もまたそのモノとの対話を始めるとき、探究の世界が多様に広がり、互いに刺激を受けながら深まっていく実践に出会うことができます。例えば、宇宙に関心を持っている子どもが、保育者と宇宙を表現する活動に熱中していると、他の子どもたちもそれぞれに表現していき、保育室に宇宙空間を作り、共に楽しみます。

虫が好きで、虫を捕まえ観察し、それぞれが虫になって遊ぶ子どもたちと共に過ごす中で、虫が苦手だった保育者も虫の世界に魅せられていきます。「安心」して自分なりにモノと対話する世界が保育の場面で広がっていくとき、子どもが学びの世界だけでなく、保育者の学びの世界も共に広がるようです。

### モノとの対話が閉ざされるとき

ところが、保育の場面では、このようなモノとの対話が閉ざされてしまうこともあります。それは子どもにとって「安心」できない場面とも言えるでしょう。

男の子が長い筒を持って振り回していました。ふと窓枠に当たるといい音がします。彼は、リズムをとるようにたたき始めました。ところが、そこに通りかかった保育者が「危ないからたたいたちゃだめよ」と声を掛け、彼の探究はそこで終わってしまいました。この

場面に見るように、子どもとモノとの対話が保育者に見えていないとき、モノとの対話は閉ざされてしまいます。

また、やはり筒でさまざまな容器をたたいて音の実験をしているように見えた男の子がいて、保育者が「太鼓しようか」と音楽をかけてあげたときも、その子はその太鼓遊びを他の子どもと楽しんではいたものの、最初にあったその子とモノとの対話は閉ざされてしまったように感じました。つまり、子どもがモノとの対話を、安心して自分らしく、じっくり続けるためには、保育者があらかじめ持っている枠組みで捉えるのではなく、保育者も共にそのモノがどのようなものであるかを新たに知る姿勢、未知性に開かれていることが必要であるように思います。

さらに、保育の場では、子どもが熱中でできるモノやコトと出会えず、他のことに「安心」を求めざるを得ない場面もあります。例えば、

保育者がやってほしいと思っていることを、子どもが敏感に感じとり、そのように振る舞い、保育者に良い子と受け入れてもらいたいことが最優先になってしまうとき。友達に受け入れてもらうために、自分が望まないことでも、友達が要求するように同じことをしようとするとき。このような、他者が望むことに合わせることで安心しようとする子どもの姿は、他者に受け入れられて何とか安心したい不安の裏返しでもあると捉えられます。

本場に「安心」して遊ぶこと。それは、子ども自らが、他者の評価枠にとらわれず、自分らしくモノと対話できること、そして、その自分らしさが、他の人とかかわりにも活かされ、互いに活かし合うことができるかわりに広がっていくことなのだと思います。その「安心」には、子どもとかかわる大人もまた自分らしく、子どもを尊重して共に探究する世界が伴っているように感じる最近です。